山田　脩 (1841～1921)	二本松に生まれ、明治十年には自分からアメリカに渡り、ニューヨークの絹織物業者に生糸を売るために支店を開きました。そのため、外国でも二本松製糸会社の生糸は有名になりました。 ところが、明治十九年には世の中が不景気になり、二本松製糸会社は解散しました。しかし、脩は今までの土地や建物を引き受け「双松館」という製糸工場をつくりました。 その他にも、安達地方にすぐれた製糸技術を広め、福島県蚕糸学校をつくることに努力しました。また、二本松町長になり、町のためにつくしました。脩翁の銅像は、霞ケ城公園内の「双松館」のあとに建てられています。
塩田力蔵 (1864～1946)	二本松に生まれ、陶磁器（せともの）の研究者として有名です。福島師範（今の福島大学）を卒業し、二本松の小学校の教師になりましたが、その後上京し陶器の研究を一生懸命に行いました。その研究は東京美術学校長の岡倉天心に認められるほどになりました。 力蔵が陶磁器の研究に進んだのは、兄の健蔵が二本松万古（塩田万古）を作り、売っていたからだと言われています。 力蔵は陶器の本づくりにも一生懸命に取り組み、十年間もかけ立派な本を完成させました。明治・大正・昭和にわたって、陶磁器の研究者として全国的にも有名です。
服部　宇之吉 (1867～1939)	二本松に生まれ、中国哲学（人の生き方などを研究する学問）者として有名です。 小さい時に両親を亡くしましたが、苦労しながらも勉学を続け、東京帝国大学（今の東京大学）を卒業しました。 中国やドイツに留学した後、中国の北京大学教授やアメリカのハーバード大学の教授になりました。また、東京帝国大学の教授にもなりました。 「詳解漢和大辞典」は、今でも多くの人に利用されています。
朝河貫一 (1873～1948)	二本松に生まれ、世界的に有名な歴史学者となりました。 特に有名な話は、中学時代の貫一は、英語の辞書を１ページごとに暗唱し、暗唱した後はそれを破りすてたり食べたりしてしまい、残った表紙は校庭の桜の木の根元にうめたということです。この桜は、母校の安積高等学校に「朝河ざくら」と呼ばれ、今も残っています。